

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業

## 実施報告書

プログラム名	「資質・能力」を育成する授業力を学校全体として高度化させる教員研修プログラムの開発 — 教職大学院のカリキュラムデザインを活かした教育委員会との協働 —
プログラムの特徴	<ul style="list-style-type: none"><li>・教職大学院専任教員と宮崎県教育研修センター指導主事が協働して開発したテキストを活用した研修プログラムであるとともに、協働してテキストを更新していくものである。</li><li>・各学校での校内研修に、指導主事とともに大学教員が参加することによる、学校の直面している課題に応じた大学院レベルの研修体制を構築するものである。</li><li>・教職大学院のカリキュラム構造や体制を反映させたプログラムであり、FDによる研修プログラムの改善も教育委員会と協働するものである。</li><li>・西都市にある全小中学校 15 校を対象とするように市町村単位の研修プログラムを確立しようとするものである。</li></ul>

平成 30 年 3 月

機関名 宮崎大学大学院教育学研究科  
連携先 宮崎県教育委員会 西都市教育委員会

## プログラムの全体概要

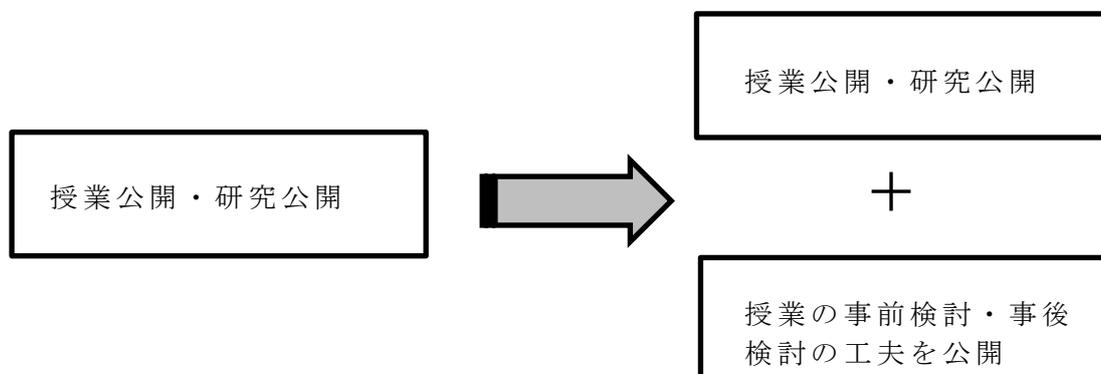
### 校内研修の活性化に関する研修の構造化

対象	位置づけ	主催	連携
スクールリーダー ミドルリーダー	校内研修の活性化リーダーシップ研修	宮崎県教育委員会	講師派遣
スクールリーダー ミドルリーダー (教職大学院派遣現職教員)	校内研修の活性化リーダーシップ研修	宮崎大学教職大学院	講師派遣
全教職員 (教員免許更新講習受講者)	校内研修活性化フォロアーズ研修	宮崎大学教職大学院	テキスト協働 作成
全教職員(希望者)	宮崎大学(附属学校園を含む)が実施 する課題別研修	宮崎大学教職大学院	各学校等への 周知
各学校	「校内研修の活性化」支援・研究プロ ジェクト研修	宮崎県教育委員会	講師派遣及び 協働
学校長及び研究主任等	「初任者研修を軸とした校内研修の活 性化」研修	宮崎県教育委員会	講師派遣及び 協働

\*対象を軸に、大学及び教育委員会の研修を整理した。今後は、ライフステージに応じて、さらなる構造化を図る。

### 附属学校園を活用した教員研修の構築

#### 【附属学校園の研修機能の充実】



## I 開発の目的・方法・組織

### 1 開発の背景と目的

平成 20 年度に設置された宮崎大学教職大学院は、これまでに修了生に対する勤務校における授業力向上フォローアップ事業や、宮崎県内の教職員を対象にした教育フォーラムを通して、県内の教育委員会や学校と連携した大学院レベルの研修を企画・実施してきた。平成 26 年度より、宮崎県教育委員会が主催する校内研修の活性化モデルプログラム事業に教職大学院専任教員を中心に参画し、宮崎県教育研修センターとの協働体制を構築してきた。校内研修の活性化モデルプログラムの実践協力モデル校への視察・支援を協働で行うだけでなく、ハンドブック『校内研修を推進するために、学び合いを活性化させるための Q&A (宮崎県教育研修センター・宮崎大学大学院教育学研究科)』を制作してきた。平成 27 年度より、宮崎県教育委員会が主催する研修のうち、大学で実施する教員研修プログラムの開発に取り組み、平成 28 年度より附属学校園とも協働して「研究授業の充実」を視点とした研修プログラムを構築してきた。

本事業により、宮崎県で実施される「校内研修の活性化」にかかわる教員研修プログラムを構造化するとともに、大学で実施する研修や大学院の授業を各学校における校内研修体制の構築にまで連続させた。大学院と教育委員会が連携することで、これまで、大学、附属学校、教員研修センター、公立学校それぞれで取り組まれてきた教員の資質向上に関する研修を構造化するとともに、教職大学院が培ってきたメンター指導等の知見を生かしながら、体系的にまた段階的に、しかも大学院のレベルで展開する研修プログラムを開発した。

### 2 開発の組織と方法

宮崎県教育研修センターや西都市教育委員会と協議を重ね、研修プログラムの開発の趣旨と目的を共有するとともに、研修プログラムの構造的な理解の共通認識を図ってきた。また、互いの状況と役割分担を確認するとともに、開発後の連携のあり方に見通しを持ってきた。宮崎県教育委員会とは、独立行政法人教員研修センターとの連携協定についても、内諾を得た。本事業では、宮崎大学教育学部附属教育協働開発センターが実施を担った。宮崎大学教育文化学部附属教育協働開発センターは、2013 年 10 月に前身の教育実践総合センターより改組している。教育臨床部門を廃止し、教育委員会や学校との協働のもと授業研究と教師教育を中心に取り組むことに特徴があり、統括リーダーを配置するとともに、兼任教員を選出し、組織的な対応を可能にしている。

## II 開発の実際とその成果

### 1 「校内研修の活性化」リーダーシップ研修

(1) 学校力アップ研修「教職員も学び合う校内研修活性化へのプロセス」

日時：2017年6月13日(火) 9:00-16:00 場所：宮崎県教育研修センター、

目的：「学び合いの文化」を醸成し、教職員の資質能力向上とともに学校力の向上を図るため、校内研修推進の課題を見出し、活性化に向けた具体的手立てを検討する。

内容：ガイドブックを活用した講義の後、校内研修の活性化に関する実践発表を行った。さらに、ワークショップを効果的に用いた校内研修のあり方について、ワークショップを行った。

受講者：51名(小・中・高校・特別支援学校主幹教諭・指導教諭・教諭・講師)

(2) フォーラム「学力向上と教員研修－教員の質向上に資するキャリアデザイナー－」

1 目的 宮崎大学教育学部・教育学研究科・附属学校における宮崎県教育委員会との連携による教員研修の取り組み、研修のあり方、連携・協働のあり方について理解すると共に、今後のあり方について考える。

2 日時 平成30年2月17日(土) 午前10時30分から12時00分

3 場所 宮崎大学創立330記念交流会館コンベンションホール

4 参加者 宮崎大学教育学部・教育学研究科教員、宮崎大学教育学部附属小学校・中学校教員、宮崎県教育庁学校政策課、宮崎県教育研修センター、宮崎市教育委員会、宮崎県教育関係者

### 5 内容

時刻	項目	内容等
【オープン】フォーラム「学力向上と教員研修－教員の質向上に資するキャリアデザイナー－」		
10:00	受付	<コンベンションホールホール前>
10:30	開会	○あいさつ：添田佳伸(宮崎大学教育学部長) ○説明 ○諸連絡
(10:35)	報告1	○「協動的授業改善を中心とした参加型教員研修」 木根主税(宮崎大学大学院教育学研究科准教授) 河野和寿(宮崎大学教育学部附属小学校教諭)
(10:45)	報告2-1	○「附属小学校のアウトリーチについて」 川崎伸幸(宮崎大学教育学部附属小学校 校長)
(10:50)	報告2-2	○「大学と附属校の連携による教員派遣型研修～西都市主催の道徳研修の事例報告～」 椋木香子(宮崎大学教育学部准教授)、後藤和之(宮崎大学教育学部附属小学校教諭)
(11:00)	報告3	○「授業分析を中心とした授業研究による教員研修」 吉村功太郎(宮崎大学大学院教育学研究科教授)、鬼塚拓(宮崎

		大学教育学部附属中学校教諭)
(11:10)	講 評	○講評1：阿部泰宏（宮崎県教育研修センター 教育支援課 教育支援担当 指導主事） ○講評2：竹内元（宮崎大学大学院教育学研究科准教授）
	まとめ	○質疑とまとめ
11:30	講 演	○「本件の学力の状況」 北林克彦（宮崎県教育庁学校政策課主幹） ○質疑
11:55	閉 会	○あいさつ：新地辰朗（宮崎大学教育学部附属教育協働開発 センター センター長）

## 2 「校内研修の活性化」フォローアップ研修

日時：2017年8月24日9:00-17:00

場所：宮崎大学木花キャンパス旧国際連携センター101研修室

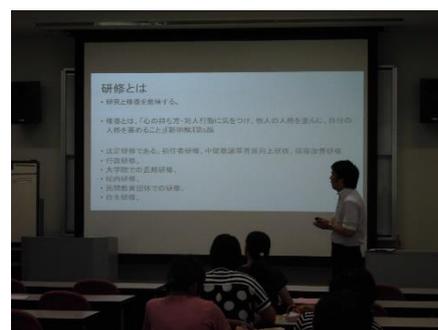
目的：日々の授業実践や学校改善に生かすことのできる校内研修のあり方を考え、教師教育の改革動向や授業研究の実践課題をふまえて、授業の事前検討や事後検討のあり方を多角的に理解し、日々の授業づくりと教師の力量形成を有機的に関連させる方法を検討する。

内容：授業力の向上を図る授業研究を中心とした校内研修の意義や課題を理解するとともに、事例をふまえながら、ワークショップを行った。

受講者：39名（幼・小・中・高校・特別支援学校教諭・講師）

授業研究と教師の成長（校内研修の活性化）は、教員免許更新講習の選択必修領域に位置づくものである。授業力の向上を図る授業研究を中心とした校内研修の意義と具体的な方法について、事例も交えながら身につけることを目指したものである。湯田拓史、遠藤宏美、吉村功太郎、竹内元が担当した。

まず、受講者は校内研修の取り組みがどのように組織的、計画的に展開してきたか、その歴史と効果を学んだ。教育公務員には、能率を高めるためではなく、子どもの発達を保障するために研修がある。校内研修は、学校を単位とする実践研究であり、教師の職能成長の舞台として共通性と個別性のバランスのとれた地点に位置づき、ニーズにあった上、同僚と共有できる学びが成立するのである。また、今後、若手を育成するためにも、職場での研修が大切となる。さらに、チーム学校とコミュニティスクールの進展のなかで「連携」と「協働」と「チーム」をキーワードに、「校内研修」を充実させる必要がある。今後は、連絡・情報交換ではなく、調整が必要であり、役割分担と分業システムの検証が必要となってくる。校内研修は、閉鎖性と保守性を克服しつつ、さらに全員参加にとらわれず、教育課題に対応するためのチームを形成して研修機会を充実させる必要がある。





次に、主題研究を中心とした校内研修の現状を概観し、日々に授業改善や学校改善に活かすことのできる校内研修とはどのようなものかを検討した。報告ではなく、研究にするためには、具体的に何が変わったかを検証することが必要となる。研究主題を焦点化し、仮説を適切に設定する必要がある。また、授業を設計し展開するだけでなく、授業をふりかえる時間を確保しておく必要もある。子どもの事実から教師の行為をとらえ直す授業分析力を向上させることができれば、授業開発力や授業展開力も向上する

るのではないかと指摘された。

最後に、教師教育の改革動向や授業研究の実践課題をふまえて、授業研究を中心とした校内主題研究を充実させるためには、何が必要か、どのような工夫があるかをワールドカフェというワークショップ形式で参加者相互の考えを交流した。

アンケート結果より

□校内研修についてはあまり乗り気でもなく、本当に成果があるのかを疑問視するところもあったが、テーマの設定の仕方でも個人で設定できるものであれば、多少なりともやっていけそうな気にもなりました。また、テーマ設定を急ぎすぎないというのも次年度の参考になりそうです。

□校内研修に全職員が意欲的に参加できていないことが多かった。今日の講習を受けて、校内研究の進め方を変えてみようと思います。一人一授業、指導案の簡略化、事前研の短縮から始めてみようと思います。

□今年も研究主任となり、2学期の主題研をどう組み立てていこうか悩んでいたもので、今日の講義はとても勉強になりました。特

に「教師個々の授業力を向上させる授業研究会のあり方」や「校内研修の活性化を図る方法」についてたくさんヒントをいただきました。

□現在の校内研修の課題や校内研修を活性化させるための手立て等について、いろいろ考えることができた。現在は学校現場から離れているが、現場に戻ったら是非挑戦してみたいことがいくつかあり、大変参考になった。

□最後の話し合いの形もとても参考になりました。校内研修でもぜひ紹介していきたいです。

□校内研修の意義や進め方など、日頃深く考えないことを考えました。他の教師や学校の校種別の教師からも情報をいろいろ教えて頂き、大変勉強になりました。ワールドカフェというワークショップはとても意見が述べやすく、楽しく活動できました。

□すべての講義がとてもわかりやすかったです。そして、とてもうまく構成されて「校内研修の活性化」のヒントをたくさんいただくことができました。自分で調べてみたいこともたくさんあります。



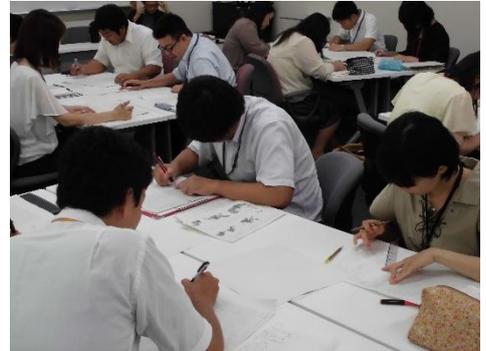
### 3 附属学校園を活用した「研究授業の充実」研修

#### (1)「国語科の授業づくり－教材解釈と発問づくりから表現へ」報告

平成 29 年度宮崎大学で実施する教員研修「国語科の授業づくり」－教材解釈と発問づくりから表現へ」は、2017 年 6 月 19 日(月) 9:30－16:30 で実施した。担当は中村佳文(国語科教育)と竹内元(教育方法)である。

小学校国語教科書(東京書籍と光村図書)に採録されている物語、「おおきなかぶ」、「サラダでげんき」、「注文の多い料理店」、「ごんぎつね」の教材解釈を通して、物語の指導の基礎を培った後、表現読み、朗読へと段階的に取り組む中で、受講者間の対話を促しながら、教材解釈をさらに深めるものである。

教材解釈では、授業成立の条件について、まず今の子どもたちの現状として、一般的にいわれている学力が高い層と低い層、コミュニケーションが豊かな層と乏しい層のマトリックスを使って説明した。学力は低い層がコミュニケーションが豊かな層から、学力が高くコミュニケーションが豊かな層に働きかけることで全員が参加できる授業が成立する。そのために、学力が高い層がコミュニケーションの乏しい層のコミュニケーションをどのように豊かにしていくかを考えなければならない。二つ以上の解釈が成り立つ物語教材の学習の中で、他者の読みに関心を持ち、自分とは異なるが納得できる読みを聞くことを通して、対話のある学びを成立させていくことが必要である。



次に具体的に教材を解釈しながら、教材解釈のあり方や授業づくりについて考えた。物語には二つ以上の読みが成立することを、登場人物、セリフ、繰り返しの中の変化などの読みの観点をもとに示した。そのさい、発達段階を考えると、低学年では、言葉ではなく動作化で子どもの問いや読みの違いを理解していくという指導の方法も考える必要がある点、今の子どもたちの学習の状況を考えると、動いたり、書いたりする操作性



のある活動を行い、教材に働きかける力を高めたり、教材の内容を整理し、読み深める中で戻れるツールをつくるなど、子どもたちが教材と向き合う条件をそろえる活動が必要である点について、具体的な教材をもとに考えた。

表現読み・朗読では、ことばあそび歌でウォーミングアップが始まった。意味を考える前に声に出してみる経験であるが、間違えることを恐れないことへ挑戦するものである。教師は詩を教えようとする。教えようとする

前に、音を表現することを忘れていた。

次に俵万智さんの短歌「うちの子は甘えんぼうでぐうたらで 先生、なんとかして下さいよ」を使ってワークショップを行った。この短歌を読む一人とそれを三人で寸劇で表現するアクティビティである。場面が言葉と関連している、場面場面に即した言葉・表現があることへの気づきを促すものである。

以上のアイスブレイクを経て、「ごんぎつね」を使ったワークショップに入った。まず、表現読みをつくる活動である。どういうふうに役割分担したら、声でイメージが伝わるか、どんなふうに読みを工夫したらよいか、どんなセリフ、どんな擬態語、どんな効果音を使うかなどを考えて読みを交流する作業である。4 人 1 組である。受講者は、教材にラインや印、気づきを書き込みながら、それぞれの読みを交流した。

次は、何度も繰り返し練習しながら、表現読みをつくる作業である。45 分の試行錯誤はあっという間に過ぎていく。リハーサルを経て、発表を行った。

表現読みを終えて、気づいた点は以下の通りである。

- (1) 「兵十だな」というセリフで、「な」を止めるのではなく、長くのばすことで、兵十をごんが前から知っている様子が伝わってきたり、「どなり立てました」を話者があえて読まずに表現することで、「どなりましたではない」点がイメージできた。
- (2) 地の文において、ごんがしたことと見たことを役割を分けて表現していた。
- (3) 位置と方向性を考えて劇化していた。また、ごんは語ろうとしたのか、ひとり言なのか、内言なのか、誰に向かって話すセリフなのか視線で表現していた。
- (4) 場の転換が工夫できたのではないか。見ている人の後方からはじめても良かったのではないか。
- (5) セリフが重なるなど、間の工夫が随所に見られた。最後の一文は話者に語らせるか、兵十に語らせるかを検討の余地がある。

専門の異なる教員が講義をすることで、授業に対する多角的なアプローチを体験する研修となった。次年度も継続して実施したい。



## (2) 図画工作科の授業づくり報告

事後検討会は、写真で授業をふりかえりながら協議題を設定した上で、授業者反省・協議となった。幸先生より協議を受けてのコメントがあった後、発言していない先生を中心に、日頃の実践の中での悩みも含めて参加者の声を聞いた。

本実践は、子どもたちが素材とどう出会うか、造形工作にどう参加を促すか、どのように鑑賞させるかという点で、それぞれの場面で工夫がなされている。また、題材との出会いから鑑賞までアーティストの知を生かすにはどうすればよいかが実践のテーマとなっている。

(1) 5mというスケール感のある紙を用意するだけでなく、いろいろな質感、紙の硬さに変化をつけて素材を準備している点。

(2) 創作活動をする場所を狭い範囲に限定することで、苦手な子どもも他の子どもをまねて作り始められるように、子ども同士が関わる場を設定している点。

(3) 照明を当てる光の色や加減を変えることで、町の景色を演出して、子どもたちに作品を鑑賞させている点。また、床に近い虫の視点から作品を鑑賞させている点。



協議では、以下のような参加者の感想が寄せられた。

1) スケール感のある、思いっきり活動できることが、子どもたちの集中をつくり出しているのではないか。

2) アーティストやアーティストの作品といった“ほんもの”にあこがれることが、子どもたちの創作意欲につながっているのではないか。

3) いくつかの活動が交じり合いながら、創作が進んでいくところが低学年の特質ではないか。

4) 「紙が立つとは、何だろう」「折れるとは、何だろう」と言う問いを持って、子どもたちは活動していた。「どうすれば、上手くいくか」という How to を教えるのではない授業のつくり方に関心を持った。



さらに、指導助言をした幸秀樹教授が示した二つの視点を深めていく協議となった。

1) 芸術家の知を活かした芸術教育とは何か。

アーティストはアクセルを踏み込んで、教育者がブレーキをかける、そうしたせめぎ合いの中で実践が取り込まれる。「統一」ではなく「変化」を求めるアーティストが授業に入ってきたとき、授業はどう変わるのか。教育者である岩切先生が、導入と終末を行っていた。教育者からすると、アーティストは、生きた教材であり、ともに活動する実践者である両義性を持っている。本実践は、この点を踏まえた授業の構成になっており、子どもたちの発想に出会うとともに、作品の鑑賞まで形づくられた実践となったと思えた。

2) 芸術教育における学びとは何か。

芸術教育では、モノがあるイメージを呼び込むとき、そのイメージを異化できるかが問われてくる。たとえば、立方体の展開図からどう立方体をつくるかではなく、立方体の展開図を様々に折るなかで、全く別の立体が立ち現れる。イメージどおりにいかに作れるかではなくて、つくりながらイメージが立ち上がってくるか。つくりながら、自らのモノサシに出会っていくのである。5mのロール紙をどのように立て、どのように組み合わせるのか設計図が最初からあるのではない。スケール感のある紙で「何とか立てたい」「どうしたら立つのだろう」「立つって何だ」と、活動の中で素材から問いかけられ、応えていくことが、作品を創り出していくことではないだろうか。

図画工作の授業づくりにおける事後検討会は、指導助言者が事後検討会の途中で協議の観点を示し、参加者それぞれが自らの実践の事実や課題を持ち込むことで、有意義な実践検討が行われた。

名称：大学で実施する教員研修 - 図画工作の授業づくり

日時：2017年7月18日（火）13:30-16:30

場所：宮崎大学教育学部附属小学校・体育館及び図画工作室

指導者・指導助言：大野匠・大泉佳広・樺島優子・幸秀樹・石川千佳子・岩切武志・郷田良太郎

参加者：15名

### (3)「道徳科の授業づくり—授業分析に基づく授業研究と授業改善」報告

日時：2017年10月20日(金)

場所：宮崎大学教育文化学部附属小学校

参加者：22名

#### 〈本研修の目的〉

椋木より本研修の目的について説明がなされた。道徳科は他教科と比較した場合、授業に関する研究が少なく、どのような授業構成を行えばよいか、授業づくりをどう進めるか、子どもが議論する道徳授業をどう工夫すべきかなど課題が多い。本研修では、教科化のポイントを踏まえ、研修参加者が事前に教材解釈を行い、授業の指導の目的・ねらいについて理解したうえで研究授業を参観することで、より効果的な事後研究会ができると考え、研修のあり方を提案するものでもある。事後検討会が、授業者の批評になってしまうのではなく、学校や子どもの実態が異なる中でも、参加者の今後の授業改善に生かせる研修となることを期待し行うものである。

#### 〈講義：道徳の教科化のポイントと今後の道徳の授業づくり〉

椋木より学習指導要領改訂までの経緯と教科化のポイントについて講義が行われた。道徳の教科化の背景としてメディアでは規範意識の低下やいじめなどが取り上げられている。しかし、それだけではなく、今後の社会の変化の中で知識・技能を持っているだけではなく活用できる力、他者と協働して問題解決を図る力を育むために、多様な価値観の理解や学び方の改革の動きの中で道徳教育の充実が求められてきている。

道徳の教科化は、これまでの道徳授業のすべてが否定されているわけではない。読み物教材の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な授業や、発達段階をふまえない分かりきったことを扱う授業など、これまでの道徳授業の課題を検討し、さらに充実・改善を図っていくことが求められている。また、「考え、議論する道徳」というキーワードがあるが、議論という手法だけがクローズアップされてしまい、全ての学年で議論を行うようなことになってはならない。発達段階や学習内容を踏まえた授業改善が求められている。

指導要領の改訂のポイントから、今後の道徳の授業づくりについて考えた。指導要領改訂のポイントとして、目標、指導内容、指導方法、評価についての説明がなされた。特に評価については、参加者の関心も高かった。評価については、まだ評価の観点が決まっていないが、子どものワークシートなどの記述内容等をどのように解釈するかが重要である。児童生徒の成長を評価するために、ノートやワークシート等を蓄積するポートフォリオの作成が提案されている。また、児童生徒の成長の評価を次の授業改善に生かしていくことが大切である。道徳教育に係る評価のあり方に関する専門家会議では、評価の視点として、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身とのかかわりの中で深めているかという点が示されている。

「考え・議論する」道徳授業を行うためには、子どもが考えたい部分はどこか、教師のねらいは何でどのように発問すればねらいに迫れるか、そのための展開はどうあればよいかを検討する丁寧な教材研究(資料分析)が求められる。

#### 〈資料解釈と授業構成についてのグループワーク〉

研修参加者で、読み物資料「おれた ミラー」の資料解釈と授業構成についてのグループワークを行った。まず、各自資料を読み、資料を解釈し、どのようなねらいを設定しどのように授業を展開していくかを考えた。その後、グループを組み、それぞれが考えた授業のねらいや展開を出しあった。授業の展開例として、状況の整理が重要であることや、子どもの多様な意見を出すために役割演技を行うこと、謝る・謝らないでそれぞれの理由を聴いていくこと、謝る・謝らないという判断をした後どんな気持ちになるか

を考えさせることなどが挙げられた。

#### 〈本時の指導案の説明〉

椋木よりノート指導の在り方やノートの取り扱い方について、解説がなされた。さらに、授業を参観するにあたって、発問に対する子どもの応答予想を参加者が事前しておくことが提案された。今回の授業では、役割演技の際、子どもがどう取り組むのかを予想するのである。なお、今回の授業に対する参加者から質疑もなされ、多面的・多角的に考えるための授業の構成に関する特質や他教科との違いについて理解を深めることとなった。

#### 〈授業〉

登場してくる人物の挿絵を見ながら、どういう状況かを子どもたちが予想する時間があった。お話しに入った。誰が言ったのかを明確にしなが、人物絵を見せながら、ストーリーを語った。その後、子どもたちの感想を聴き、「そもそも公園でサッカーをやればいい」という考えも含めて、良いところと悪いところを整理したうえで、「やっちゃったら、どうすればいいか」のテーマで話し合い、劇化することを子どもたちのつぶやきを拾いながら合意した。その際、しゅうじ君、たくや君の立場を確認したうえで、さとる君がどう悩んでいるかを確認した。

次に、それぞれの人物の役割を確認しながら、役割演技をやりたい人を募った。役割演技は、お話のセリフの続きを考えるものである。また、「どうでもいい」という発言をめぐって、その意味を考え合った。さらに、「もしここに自分がいたらどうする？」とさとる君の立場で考えたことを出し合った。正しいと分かっている、こういう状況になることを共有しながら、自分ならどうするかを考え合った。

#### 〈事後検討会〉

授業を見た感想を参加者で出し合い、子どもの学びを解釈し合った。

(1) 善悪の判断とはどういうことか。「あやまるのは勇気がいる」という勇気でも、「あやまるのはすっきりする」という正直でもなく、授業の中でどういう言葉が出てくることが目標とされたのか。

何を基準にあやまったらいいのかを教師が聞いていたとき、子どものほとんどが「怒られるから、謝りに行かないといけない」と発言していた。また、「心から謝らないといけない」という子どももいた。そのどちらかでもなく、「ああでもない、こうでもない」と協議していた点が評価できる。

(2) 「逃げる」という発言はどう考えるか。概念的に考えるのではなく、当事者性をもって考えるという点で評価できる。“よい”と分かっている、実際に難しいことを実感したのではないか。こうした判断することの難しさに対する本音が出てくるためには、さらに学習テーマを明確に示すことの重要性が確認された。

(3) 板書の形成はどのようにして決めているのか。場面ごとに気持ちを問う場合は、板書を右から左の縦書きに記すが、大きく問うときは、左から右の横書きで書く。授業の構成に合わせて、板書の全体像が決定しているのだ。

(4) 心情を深めるときは、価値を授業で検討する。焦点化するが、判断力を形成するときには、価値を焦点化すると、全員が参加することにならないのではないか。互いの見方を交流する中で、個々の価値観がどのくらい発展していくかを構想するのである。

#### 〈参加者の感想〉

(1) 役割演技が疑似体験になっている点が参考になった。「あやまるのがぜったいいいんだ」と考えていた子どもがゆさぶられたのではないか。

(2) 思っていることが発言できないのではなく、一人一人が意見を持っていた子どもの育ちが参考になった。

- (3) 学びはあったがすぐ実践できないのが道徳の授業だと改めて感じた。  
 (4) 自分の経験からチャレンジしていかないといけない。本音を言える学級づくりができていることが大事に思えた。  
 (5) 子どもたちが授業の道筋を教師とつくっていたのがすごいと思った。  
 (6) 子どもが言ったこと、書いたことの解釈が人によって違うため、評価が多様になってしまうという問題に改めて気づくことができた。



(4) 社会科の授業づくり～授業の分析力を高める逆向き指導案作成～

日時：2017年10月26日（木）9:30～16:30

会場：附属小学校

（研究授業：4年1組教室、オリエンテーション・授業研究会：教育実習生講義室）

実施校園：附属小学校4年1組

附属小担当教諭氏名：永倉泰治

宮崎大学教員氏名：吉村功太郎、藤本将人

研修参加者：11名（公立小学校教諭等3名、公立中学校教諭3名、公立高等学校教諭等2名、教職大学院学生3名）

内容：小学校社会科の授業を参観した後に、授業展開などを学習指導案に書き表します。その後、各自の指導案を様々な視点から比較検討し、授業分析・評価・改善の力量形成を目指します。

## 本研修プログラムの目的と方法

□目的：社会科授業力（特に分析力）の向上

□本研修プログラム開発の背景にある考え方：本プログラムでは、①〔授業構成力〕授業プランをつくる力（授業計画）、②〔授業展開力〕授業を行う力（授業実践）、③〔授業分析力〕授業をふりかえる力（授業評価）の3つの力によって授業力が成り立っていると捉えている。また、これらの授業力の基盤となるものとして、〔子ども研究〕こどもの実態把握と教材研究〕授業の目標・内容・方法という2つのことを研究する力が必要であると考えている。日常の教育活動において、教師は①授業構成と②授業展開は実施しているが、③授業分析については①②と比較してあまり行われていない状況があると考えられ、授業構成力や授業展開力に比べ、授業分析力が弱い教員が多いことが予想される。これら3つの力がバランス良く伸びてこそ、授業力全体が伸びるのではという考え方が、本研修プログラム開発の根底にある。

□方法：まず、「講義1：授業力向上のために求められること（理論的背景と本研修の目的）」において研修の目的や方法を理解してもらった後、実際の授業の観察を行う。その際には、学習指導案は配布しない。授業観察後、演習として各自パソコンを使用して観察した授業を学習指導案に起こしてもらい、データを集めて全員分コピーをする。全員が学習指導案を共有した上で、各自が順番に自分の指導案を説明し、他の参加者や研修講師から質問やコメントを出してもらい、考えを共有する。その上で、授業実践者の指導案を配布して説明をしてもらい、質疑を行う。最後に、研修講師から講評コメントを行う。

## 本研修プログラムの実際と効果

8名から出された学習指導案は、本時の目標から学習内容、指導上の留意点など、全ての点において多様な記述になった。研修参加者が観察した授業をどのように分析し、どのような目標・内容・方法を持つものとして解釈したか、また、具体的な授業場面で授業者がどのような意図を持って児童に対する指示・発問等を手立てとして講じたのかが、指導案上に現れることになる。観察者が授業の何を観て、何を教育上重要な内容や方法であると考えたのかが参加者全員で共有し、それについての質問や意見、コメントを交換することになる。今年度は、採用2年目の教諭が2名、正式採用前の講師が4名、高等学校教諭が2名というメンバーであり、ベテラン教員の作成指導案の事例が無かったことが残念ではあったが、経験年数が少ない小中学校教員が作成した指導案に書き表されている内容にもそれなりの違いがあり、授業分析に関する点で互いに学び合うことができた研修になっていた。

今年度は現職教員だけでなく本学の教職大学院生も参加しており、学生が作成した学習指導案を共有することで、現職教員と学生がともに学び合えるものとなっていた。また、大学教員にとっても、教員養成における課題の一端をつかむことができるものとなっていた。

## （5）「家庭科の授業づくり～ストップモーションで検討する授業改善の方向性～」報告

### 1.研修の概要

- 1) 実施日時：平成29年10月27日（金） 14：00～16：30
- 2) 実施場所：宮崎大学教育文化学部 技術・家庭科棟2階 T210教室
- 3) 参加者：中学校教員3名、小学校教員2名
- 4) 研修内容：

#### ①課題解決学習の進め方

平成29年告示学習指導要領

- 小・中・高校の内容の系統性
  - 表面的・形式的な課題解決
  - 自身の生活課題に気づく授業
  - 実践的・体験的な活動を通した課題設定
- ②題材「自分でやってみよう（ゆでてみよう）」の授業実践についての  
ストップモーション方式による検討
- ③今後の家庭科の授業づくりに向けて

## 2. 研修の成果と課題

研修ではまず、平成 29 年告示学習指導要領の改訂の要点を押さえ、そこに明記されている小・中・高校の内容の系統性に目を向けた。その上で、学習指導要領で重視されている課題解決学習について、

表面的・形式的な課題解決となる場合と学習者自身の生活課題に気づき、それを解決していく場合との授業展開の違いについて検討した。事例として、地域の課題に対して学習者が課題設定を行なう場合、自己の家庭生活での現実（実態）を意識化させた上で、それと社会の必要性（地域の課題）との相互のズレや矛盾に目を向ける必要があること、及びそのズレや矛盾の背景を吟味し、それを学習者が具体的な課題として捉えて解決していく授業展開が目指されることが示された。

他方、今回取り上げた小学校題材「自分でやってみよう（ゆでてみよう）」での課題設定においては、学習者が調理に関する実験を通して課題を発見していく展開であった。その授業についてストップモーション方式の検討を行うことにより、学習者が実験を通して、ジャガイモのゆで時間の違いで“見た目”や“味”、“食感”が変化すること等、実感を伴いながら課題を把握していることが評価されるとともに、日常の生活における学習者の体験とどのように結びつけていくのかについての検討をより深める必要性が指摘され、参加者全員で代替案について検討を行なった。

参加者からは、「家庭科担当教員が一人しかいないため、マンネリ化、固定化してしまいがちであるが、ストップモーション方式での検討によって、様々な先生方との話のなかで新たな視点や新しい授業づくりのアイデアがたくさん浮かびました。」等の声が聞かれた。特に宮崎県における中学校・家庭科教諭の学校配置は厳しい状況にあり、今後も継続して、自己及び他者の授業研究を行なう場の設定や新しい教材の提示、さらに小学校や高等学校との連携を深めていくことが求められた。

### （6）「外国語活動の授業づくり—教科化の移行を意識して」

平成 29 年度宮崎大学で実施する教員研修「外国語活動の授業づくり—教科化の移行を意識して」は、2017 年 12 月 11 日(月)9:30－16:30 で実施した。担当は、アダチ徹子(英語教育)である。

宮崎大学教育学部附属小学校の外国語活動の授業研究を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成のための授業づくりについて理解を深めるものである。また、赤江小学校指導教諭の岩切宏樹教諭を迎え、子どもたちが意味のあるやり取りの中で自然に英語を吸収し、子どもたちから表現があふれてくるような授業づくりについてのワークショップを行った。さらに、文部科学省教科調査官 直山木綿子氏を迎え、授業研究についての講評を頂き、現行学習指導要領と新学習指導要領の相違点や来年度から使用される新教材についての講演を聴くことを通して、教科化に向けた授業づくりのあり方についての理解を深めた。

#### < 授業研究 >

授業研究では、6 年生の 15 分間の短時間学習、5 年生・6 年生の外国語活動の授業の

合わせて3つの授業を参観し、授業研究会を行った。

5年生の単元『自分の宝物クイズ大会』を楽しもうは、英語等を使ってクイズを出し合うことを通して、積極的にコミュニケーションを図るようになることをねらいとしている。授業では、教師の3ヒントクイズに答えて、クイズの出し方やヒントの考え方を振り返り、自分の宝物クイズのヒントを清書する活動を行った。その後、ペアでクイズを出し合い、互いのクイズの出し方をコピーした後、クイズやヒントの出し方がどうだったか意見交換を行った。

6年生の単元 I like my town. は、自分が住む町のよさや課題等について英語等を使って伝え合うことを通して、積極的にコミュニケーションを図るようになることをねらいとしている。15分の短時間学習は、チャンツを2種類行ったあと、‘What do you have?’ ‘I have a/an\_\_.’ ‘What do you want?’ ‘I want a/an\_\_.’の表現を使った指さしゲームを行い、前時で子どもが気付いた日本語と英語の語順の違いなどについて全体に共有し、書く活動として、自分で選んだ場所やものについて ‘I want a/an\_\_.’の表現を使って分を書き写した。45分間の授業では、担任のプレゼンテーションを見た後、ペアで自分が宮崎市にほしいと思うものについてクイズ形式でプレゼンテーションをした。数名の児童が全体に向けてクイズを行い、全体を通して、自分が選んだもの以外で宮崎市にほしいものに仮投票して結果を発表し、次時で自分の選んだものが選ばれるようなプレゼンの方法を考えることにつなげた。

授業研究会では、授業の中での日本語と英語のバランスをどのように考えるか、学習課題の達成度の評価をどのように行うのか、文字指導をどのように行うか、文法事項はどこまで扱うのか、先頭の音を意識させる音声指導について話題にあがった。また、クラスルームイングリッシュやチャンツをもっと多用することや、ペア学習は目的に合わせて自由に組み合わせたり指定したりする必要があること、音のつながりや変化する音などについて子どもの気付きから発音や表記の違いを扱うことができるなどの意見が出された。

#### <ワークショップ>

ワークショップの主たる内容は、外国語科の授業で新しく導入される Small Talk についてであった。Small Talk は、一般的にはちょっとした日常会話を表すが、授業で行うことが期待されているのは、教師が既習の表現を使いながら子どもたちとやりとりを交わし、自然な形で表現に慣れ、定着を目指すという活動である。子どもに英語を聞かせればよいと考えて、ALT との会話の様子を子どもに見せていただけだったという失敗例を動画で示したので、参加者は Small Talk が聞くだけでなく、教師と子ども、あるいは子ども同士のやりとりをも含む活動であることが明確に理解できた。また、子どもが英語を使いながら表現に慣れていき、自分のものとするプロセスを、「こなれる」という言い方で説明した。「こなれる」状態までもっていくためにも、子どもたちが意味のある、子どもたちが表現したいと思える会話を仕組んだり、自身の Small Talk のスキルを上げるべく練習したりして準備することが必要であるということだった。

#### <講演>

講演では、文部科学省教科調査官 直山木綿子氏より、授業の講評、現行学習指導要領と新学習指導要領の相違点や来年度から使用される新教材についてお話があった。

授業については、目標とそのための活動にずれはなかったかという点が指摘された。授業研究では、単元の目標に合った授業がなされているかの検討がされるべきである。6年生の授業では、「なぜ、宮崎市にその場所やものが欲しいのか」の理由が自分とのかかわりの中でしか出てこなかった。町のよさや課題とは何なのかについてもっと掘り下げていけば、「みんなのために必要」という理由が出てきたのではないかということだった。単元の目標にあった思考を深めるためにはどんな活動が必要かを検討することが大切である。しかし、外国語活動の時間だけでそこまでの子どもの思考を育てることは難しい。社会科や国語科、総合的な学習の時間など、教育活動全体を通してどんな子どもたちを育てていくか、その中で外国語が担う役割は何かというカリキュラムマネジメント

トの必要性が指摘された。小学校教員が外国語を教えることの意味は、全教科を行きつ戻りつして教えていることにある。英語を話せるようになることが大切なのではなく、中身のある伝えたいことを伝えられえる英語教育をしていかなければならない。

書く活動については、書く必然性のある場面で行うことが大切であるということが話題になった。5年生の書く活動では、話すときに手元に文字がある状態をつくるために、クイズのヒントを清書していた。しかし子どもたちの中には、大文字と小文字がバラバラだったり、単語の間の感覚が開いていなかったりする姿が見られた。英語表記に関する理解が十分でない段階で書く活動を取り入れ、英語として正しくない表現がワークシートに残り続けるよりも、話す活動を何度も繰り返してクイズのヒントがすぐに言えるようにした方がよかったのではないかということが指摘された。一方6年生の自分のいいと思ったものに投票するという活動には書く必然性がある。自分の考えを相手に伝える文字で伝えるという部分に子どもたちの気持ちが入っている。書く活動も、単に英語表記に慣れるということではなく、表現活動として必然性のあるように設定することが必要なのではないだろうか。

評価についても話題にあがった。授業では、中間評価として、アイコンタクトやジェスチャー、声の大きさ、反応を返すことを評価していた。しかし、目標に到達するための評価を考えると、これまでに学習してきた表現を使いまわして分かりやすいヒントを出しているか、自分のためではなくみんなのためにということを考えているかを評価すべきではないか。単元の中でどんな子どもを育てようとしているのかをもとに、それに向かっていくための評価はどうあればよいかを考えることが大切である。

単元や一単位時間の目標があり、そのための活動があり、目標に向かってどんなことができるかを評価する。単元や一単位時間の軸をもって活動や評価を考えていかなければならないということ学んだ。

新教材については、来年度より配布される、3・4年生教材 *Let's Try!* と 5・6年生教材 *We Can!* についても詳しく説明がなされた。算数で数量や図形についての知識を使って様々な問題を解くことができるようになることと同じように、外国語活動でも英語を使ってどんなことができるようになるかということを考えなければならないという思いが、*We Can!* というタイトルにこめられている。新教材では、'*Let's watch and think*' という活動が取り入れられている。英語を使ってコミュニケーションが行われている場面の動画を見て、どのようなやりとりが行われているかを考えたり、自分でも言ってみたりすることを促す活動である。日本語を介在せず、語彙や表現が使われる場面で意味を推測し、意味を理解していくことが求められている。さらに、新教材では、子どもが自分の考えた気持ちを表現する言語活動、文字の読み方には名称と音があることに気付きそれに慣れ親しむ '*Jingle*' などが設定されている。読み書きについては、5・6年教材 *We Can!* の中で、段階を追って学ぶことができるように工夫されている。新教材でも、それぞれの活動がどのような意味をもって取り入れられているのかを理解して取り組むことが重要であるということが分かった。

外国語活動では、どんな活動をするかに視点が行きがちであるが、単元や教科・領域を通してどんな子どもを育てるかということ意識し、活動の目的を見失わないようにすることが重要であるということ学んだ。活動を通して子どもたちが何を学ぶか、どんな力が付くのかを意識しながら、活動を設定したり、教材を活用したりすることが大切である。



## (7) 「算数科の授業づくり～その基本としての授業研究～」報告

2017年12月14日(木)、宮崎大学教育学部附属小学校において、研修「算数科の授業づくり～その基本としての授業研究～」を実施した。研修担当者は、河野和寿教諭、松浦悟史教諭、中別府靖教諭(宮崎大学教育学部附属小学校)、木根の4名であり、参加者は9名の小学校教諭であった。

本研修の目的は、確かな学力の育成を目指した算数科の授業づくりに関する授業実践力の向上であり、そのために、参加者に授業研究に取り組んでもらい、実際の授業実践に基づき、あるべき授業づくりについて検討を行った。具体的な活動内容は以下のとおりである。

時間	活動内容
9:30～10:25	オリエンテーション、事前検討会
10:35～11:20	授業観察：単元「分数」分数のたし算
11:30～13:15	事後検討会①(授業改善案作成)
13:15～14:00	昼食休憩
14:10～14:55	改善版授業の実施：単元「分数」分数のたし算
15:05～16:00	事後検討会②
16:00～16:30	まとめ・諸連絡

事前検討会では、学校教育法や現行・次期学習指導要領を踏まえた学力(資質・能力)の捉え方、全国学力・学習状況調査やみやざき学習状況調査に基づく児童の学力の実態、本研修で焦点をあてた「同分母分数の加法」に関する教材解釈などについて講話を行った。また、授業観察の対象となる授業の意図について、授業者であった河野教諭が学習指導案をもとに説明を行った。



次に、河野教諭による「同分母分数の加法」に関する授業を、参加者と研修担当者全員で観察した。ここでの授業は、使用されている教科書どおりの授業であり、参加者には、児童の実態や事前検討会での議論(教材解釈や学力の捉え方)を踏まえ、確かな学力の育成を目指した授業にむけて、この授業をどのように改善すべきか考えながら参観してもらった。

そして、その授業に関する事後検討会をグループ別で行い、それぞれが考えた授業改善案を発表してもらった。各グループからの改善案としては、「なぜ分母同士をたしてはいけないのか」についての意味理解を獲得させるために、児童に考えさせる時間を十分に確保すべきだというものと、技能面の定着を図るために、児童が練習問題(定着問題)を十分に組み入れる時間を確保すべきだというものがあり、それぞれの立場についての協議を行った。





事後検討会での協議の結果、「なぜ分母同士をたしてはいけないのか」についての意味理解を目指す方向で、本時の課題や表現活動、配布物の記載内容を工夫した授業改善案を作成し、その改善案に基づき、別の学級にて授業を実施した。

最後に、改善版授業についての事後検討会を行い、確かな学力の育成を目指した授業づくりのあり方について検討を行った。

本研修を受けた参加者の声としては、算数科における確かな学力とは何か、また、それを育成するための授業とは何かについての答えを明確に見出すまでには到らなかったものの、その答えを見出すための取り組みとして、学習指導要領の内容理解や教科書分析などの教材研究、同僚教員と協働した授業研究や児童の実態把握が重要であることを改めて考えさせたというものが多かった。普段、学校現場で同僚教員と授業研究に取り組む余裕がないと思っていた参加者だったが、本研修を通して、同じ授業について他の参加者と議論することによって、自身の教材観や授業観を揺さぶられ、広げられたという経験が得られたことは、本研修にとって大事な成果と考える。



今後は、こうした機会のさらなる提供や、参加者に対する学校現場でのフォローアップなども検討してみたい。

## (8)「授業の成立と学習集団づくり」

平成 29 年度宮崎大学で実施する教員研修「授業の成立と学習集団づくり」は、2018 年 2 月 15 日(木)13:30-16:30 で実施した。担当は竹内元(教育方法学)である。

研修では、まず、授業の成立と学習集団づくりについて、授業参観の視点について整理した。さらに、宮崎大学附属小学校算数科 松浦悟史教諭の授業を参観し、事後検討会を行うことを通して、学習集団づくりの考え方に基づく授業改善の在り方についての理解を深めた。

事後検討会では、導入、子どもの関係性の指導、習熟が話題にあがった。

まず、導入については、めあてという形で教師から子どもに今日の学習課題を言葉で示すことが重要なのではないということが指摘された。今求められているのは、学習問題が提示されたときに、問題の条件やルールを明確化していくことを通して丁寧にスタートをそろえていくということである。なぜなら、子どもたちは学習問題が提示されると、それぞれに独自のルールや解釈で問題に取り組んでしまうからである。子どもたちが一定の方向を向いて、解くべき問題に集中して取り組めるようにすることが重要である。例えば、松浦先生の授業では、2 マスの色の塗り方の場合の数を出すという問題を扱っていた。そのさい、子どもたちは複数の色で塗ることや、模様を付けることなど様々なイメージをもっていた。松浦先生は、そのイメージを質問という形で言葉にしたり指

さすなどして表現させたりして、見える化し、「塗る」ということの意味は1マス分をすべて塗りつぶすことだという条件を伝えていた。また、一度自由に問題に取り組み、困ったことや質問を出し合い、条件が欠けていることに気づかせながら、条件をそろえていくという方法も考えられる。つまり、このように子どもたちが問題を多様に受け取れることを踏まえて、それを表現させながら、取り組むべき課題を明確化することが導入の機能として重要なのである。

そのさい、学習問題の正解を導くことが重要なのではなく、子どもたちの中で単元を貫く課題が明確になっており、本時の学習課題が単元の中でどのように位置付いているのかを理解できていることが重要である。子どもたちの中には、算数は答えが出せば終わりだと思っている子どもがいる。そうではなく、算数は答えにたどり着くまでのプロセスの中で、二つ以上の考え方や誤答を理解していくことが重要なのである。たとえば、今回の授業でいえば、ばらばらに提示された4通りのマスの塗り方を見て、「きれいにしたい」と発言した児童を取り上げ、場合分けの仕方を「整理する」という単元を貫く課題が学級の中で明確になった点が重要なのである。そのことがのちの展開でマスを手板に貼っていくときの整理の仕方への気づきにつながっていた。つまり、導入では、子どもたちが学習問題に取り組んでみて、学級が大きく二つに分かれる部分や問題を解くさいに学習集団として問題になる部分を明確化することを通して、同時に子どもたちの算数に対する授業観の転換を図っていくことが重要である。

次に、子どもの関係性の指導については、話し手と聞き手の関係を育てることが、教科内容の深い学びにつながっていくということが話題にあがった。今回の授業では、聞き手の子どもたちには、相手の言っていることを理解しようとしながら聞き、それを表現するという姿が見られ評価された。しかし、話し手の子どもたちには、論理的に相手に伝わるように話すという部分に課題も見られた。話し手の子どもたちが、算数のことばを使ったり、「たとえば」と具体例を示したりしながら話すことができれば、聞き手にも伝わりやすく、議論が進んでいくのではないかと考えられる。学級のなかで、聞き手が話し手の伝わりにくい説明も懸命に聞き、理解しようと考えていることは大切である。しかし、この学級を離れたときでも、自分の考えを相手に伝え、ともに課題を解決していく話し合いを成立させていくためには、論理的な話し方を身につけさせることが重要である。話し手の子どもたちに、「たとえば」「つまり」「なぜなら」といった接続詞を使いながら、相手に伝わるように言葉を選んで説明することを求めていくと同時に、聞き手の子どもたちに対しても、「わからない」「もっと詳しく教えてください」などという反応を求めてもよいのではないだろうか。子どもたちの関係が育ってきている段階では、「わからない」という発言を学習課題に対してだけでなく、友だちの説明に対しても表明できることを伝えていってもよいのではないかと考える。聞き手が話し手の立場に立つだけでなく、話し手も聞き手の立場に立って話すことを求めることも必要であるということ学んだ。

最後に、習熟については、何を習熟させようとしているのかが重要であるということが話題にあがった。習熟は、一般的にその時間の学習問題の数値を変えたものを提示し、学習内容が理解できているかどうかを確認したり、くり返し解いたりすることによって学習内容を身につけさせようとするものと理解されている。しかし、今回の研修では、習熟は子どもたちが探究したいという関心をもつことができるようにする側面が重要なのではないかとということが提案された。今回の授業でいえば、2マスと4マスの塗り方の場合の数を出すことによって、平方数になるのではないかと子どもたちの気づきを引き出し、3マスで確かめる。3マスを確かめると平方数ではないということが分かり、マスの数と塗り方の場合の数の関係に対する問いが子ども中に生まれてくる。そうすることによって、家に帰ってから5マスを調べたい、マスの数と塗り方の関係を見出したいという思いを子どもたちが持つことができる。授業の展開によって、子どもたちが自ら学習課題に取り組みたいと思えるようにすることが、授業における習熟として重要なのではないかとということが指摘された。つまり、習熟とは、教師から子どもに与えるものではなく、授業を通して子どもたちの中に生み出すものなのである。計算の仕方や図

のかき方などを身につけさせるだけでなく、複数の考え方や多様な説明の仕方ができるようにしていくような数学的な学び方を習熟させるという考え方が必要なのではないかと学んだ。

今取り組まれている授業改善は、教師の授業スタイルの形式化を行っていることが多い。めあてとまとめを示すことを求めたり、習熟の時間を設けたりすることに取り組んでいる。しかし、授業改善とは、子どもの学び方をよりよくしていくことなのではないだろうか。子どもには見えないが身に付いている授業参加のルールやマナーを、見える化し子どもたち自身が修正していくことが必要なのである。発言や挙手、ペア・グループ学習などの授業における行為の意味とマナーを子どもたちと考え、学級の授業参加のあり方を子どもと改善していくことが求められている。



このほか、音楽家の授業づくりと体育科の授業づくりも行った。

音楽科の授業づくり

日時：2017年11月9日 13:30-16:30

講師：菅裕、藤本いく代、酒井勇也、酒匂美貴子、水流霧子

内容：実践VTR2本を素材として、子どもの主体的な表現創造活動を引き出す指導性を検討した。教科教育・教科専門・附属学校教員等とのディスカッションを通じて、実践現場が抱える課題について解決の方策を探った。

受講者：17名

#### 4 「校内研修の活性化」支援・研究プロジェクト研修

西都市にある連携協力校を対象に、西都市教育委員会と連携し、学力向上や授業研究のあり方等、校内研修の活性化を支援した。また、2017年5月10日に、西都市全教職員を対象にした理論研修を、6月15日には、教務主任・研究主任を対象にした学力調査の分析にかかわる研修を、8月1日には、西都市全教職員を対象にした指導力ブラッシュアップ研修会として、道徳の授業づくりに関する研修を実施した。さらに、西都市の研究公開校である茶臼原小学校には計7回の指導助言を行うとともに、次年度にへき地教育の研究公開を控える銀上学園には、2018年1月から2月にかけて、小学校3学年、中学校6教科の授業研究を実施した。

#### 5 「初任者研修を軸とした校内研修の活性化」支援研究プロジェクト

日南市立吾田小学校、小林市立小林小学校、延岡市立南小学校、西都市立妻中学校、都城市立中郷中学校、日向市立日向中学校を主たる対象に、メンター方式による初任者研修の実践を宮崎県教育研修センター指導主事とともに支援した。

2017年8月20日	日南市立吾田小学校
2017年9月2日	日南市立吾田小学校
2017年9月20日	日南市立吾田小学校
2017年9月20日	日向市立日向中学校
2017年9月27日	延岡市立南小学校
2017年9月29日	都城市立中郷中学校
2017年10月16日	小林市立小林小学校
2017年10月23日	延岡市立南方小学校
2017年10月24日	西都市立妻中学校
2017年10月25日	延岡市立南方小学校

- ・講師：吉村功太郎（宮崎大学大学院教育学研究科教授）  
木根主税（宮崎大学大学院教育学研究科准教授）  
竹内元（宮崎大学大学院教育学研究科准教授）  
遠藤宏美（宮崎大学大学院教育学研究科准教授）  
栗田茂樹（宮崎県教育研修センター教育支援課長）  
中武享弘（宮崎県教育研修センター指導主事）  
鈴木重徳（宮崎県教育研修センター社会教育主事）  
阿部泰宏（宮崎県教育研修センター指導主事）

さらに、2017年11月14日に宮崎県教育研修センターにて開催された平成29年度初任者研修実施校連絡協議会にて、平成29年度に初任者研修を実施した学校の校長（121名）を対象に、メンター方式による初任者研修モデル校の実践を示し、効果的な研修のあり方について協議するとともに、本学大学院教育学研究科の吉村功太郎と竹内元が、講評を行った。

### Ⅲ 連携による研修についての考察

#### 1 連携を推進・維持するための要点

- ① 附属教育協働開発センターに改組し、統括リーダーを設けることで窓口を一本化し、

専任教員に加え、兼任教員を配置することで学校現場のニーズに組織的に対応できるようにした点。

- ② 教職大学院を設置し、実務家教員と協働してカリキュラムデザインや研修内容を開発しているように、学校現場のニーズに対応して異質共同する文化が醸成されている点。
- ③ より多くの接点を持つことで、互いが置かれている状況や仕組みに理解がある点。
- ④ 研修プログラムの開発の趣旨と目的を共有するとともに、研修プログラムの構造的な理解の共通認識を図っている点。また、互いの状況と役割分担を確認するとともに、開発後の連携のあり方に見通しを持っている点。学校現場への周知に至るまでの行程とスケジュールを共有している点。

## 2 連携により得られる利点

- ① 教職大学院の研究者教員、教職大学院実務家教員、宮崎県教育委員会及び市町村教育委員会指導主事といった複数の立場が協働することで、学校現場に多角的な指導助言ができる点。
- ② 「何をどのように発言しているか」ではなく、「なぜそのように発言しているか」を理解しようとすることで、互いの理論的な枠組みを見直すことができる点。
- ③ 新たな課題を発見し共有できる点。

## 3 今後の課題

- ① 10年目を迎える宮崎大学教職大学院の認証評価や自己点検評価及び特質と課題をふまえて、教職大学院が培ってきたメンター指導の知見を生かしながら、教育課題に応じた大学院レベルで展開する研修プログラムを開発する必要がある。さらに、教職大学院のカリキュラム改善を含めて、さらなる教職大学院ならではの地域貢献を推進する基盤を整備し、宮崎県教育委員会と今後の展開を図る必要がある。
- ② ストレート院生と現職院生の達成度評価指標の違いをふまえてカリキュラムを構成してきた教職大学院の知見を生かして、ライフステージに応じたニーズの特質と課題をふまえて、若手教職員の育成とミドルリーダーとして学校や地域の活性化を担うメンターの育成を推進する基盤を整備していきたい。

#### IV その他

- [キーワード] 授業研究、教職大学院、附属学校園、  
メンター方式による初任者研修の改善
- [人数規模] D. 51名以上  
(研修プログラムによる、ここでは最大を示す)
- [研修日数(回数)] A. 1日以内

#### 【問い合わせ先】

国立大学法人 宮崎大学  
教育学部附属教育協働開発センター  
〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西 1-1  
TEL: 0985 - 58 - 5287  
Mail: gengen@cc.miyazaki-u.ac.jp  
(宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター統括リーダー竹内元)